

提唱RCとRAC

認識の相違とかかわり

小牧RC ローターアクト委員会委員長 増井 洋生

提唱ロータークラブのローターアクト委員会委員長として、その委員会活動の経緯をもととし、ローターアクトクラブという組織に深くかかわることができたことを幸いと感じながら、反省を込めてRACに対する現状の問題と今後の課題について相互の認識の相違点を確認し、RACに対する提唱RCとしてのかかわりの参考になればと思い記述します。

提唱RC会員の中でも、本来のRACに対する基本的概念を深く承知している方が多くないという現実があります。提唱クラブでありながら、RACの存在は承知しているが、実質的な活動・規約等をはじめ、RACの本来の目的をよく認識せず、理解することに努力をするという発想のないままクラブ運営にあたり、その過程で自クラブの会計を予算化してしまうことが重大なる認識の相違の原点となっていると思います。

RACへの予算は、慣例的に割り当てるのではなく、その都度、RACの会員数をしっかりと把握して必要経費を確認し、その結果クラブ活動費に見合った予算を助成するのが、本来の提唱RCの責務であると認識すべきであります。

RAC創立時に、クラブ全体でRACの目的・意義、提唱RCとしての理念・理論を深く討議することを怠り、創立するか、しないかという表面的な議論だけで、全体の総意を徹底的に確認することなく、未熟なる理念の中で創立してしまったという経緯の中で、「創立してしまった以上は継続しなければならない」という、的外れのプライドが価値観の薄い責任の取り方へ

と流れていった結果であるように感じます。

提唱RCとしての責任の在り方を、自クラブの新世代育成という理念の中で確立させることが一番重要な現実であり、その理念と理論の未確立の時はRACという重要な組織を提唱すべきではないと確信します。同時に、提唱RC会員がその理念と価値観をはっきりと認識すれば、RACの会員数の減少でRAC運営に困難を来すことも、また不作為なる会員の増強に奔走する努力も必要性も減少することは事実であると思われれます。

RACはRC会員の協力無くしては存在も継続もあり得ないのが事実であり、RACを継続させるためにはRCはかかわらなければならない義務があります。決してRACの自立などという単独的なものはあり得ないことを、RC全体が承知すべきであり、この「自主性」と「自立」の区別と判断の認識の薄さがRACを消極化させ、発展性の薄い組織にしてしまう大変重要な要因であると理解すべきであります。

確かにRACは、その自主性に基き自らのクラブ活動を行うことは当然の事業であり、そのためにRCから助成金が支給されるのであり、RCとしてもその自主性を重んじ、承知するものであります。このことをRCもRACも基本概念として相互に保持している限り、相手の意見を尊重し、良きパートナーとして認知し合うことが可能となり得るのです。

RAC創立当時には、両者ともこの関係を当

然のこととして事業を開始したことも分かります。しかし時が経過し、RC会員は自らの多忙さの中で、RACは自主性を持ちながら事業を展開することがベストであり、RCからあまり深くかかわらないことが提唱RCの立場であり、大人のマナーのような錯覚をしてしまった観念が育成されたものであると承知します。

その原因の一つに、RACという組織は人の集まりであり、人の育成には長い時間と根気が必要という重要な観念と理念を維持することが大変手間のかかることであり、エネルギーを必要とする事業であるという現実があります。揚げ句、RACは独立した組織だからという身勝手な理由付けを掲げることで、自らの「おっくうさ」「面倒くささ」の妥協点を正当化させるための安易な意識の表現となったと理解できます。

提唱RCは助成金を支給するから「RACは自主性を持って活動してください」という観念は、ローターアクターたちにとっては「助成金さえ支給してくれば結構です。後は私たちが自由に楽しめますから何も言わずに放っておいてください」という、誠に相互の理念に対する認識が別々の所に存在するという現実を実現します。

この関係は一時は非常に良い関係のように錯覚し、それぞれの価値観と認識で充実感を満たすものであります。しかしこの時、二つの重大な問題が発生する時でもあることは確かです。

その第1は、ローターアクターたちは無条件で支給されたと勘違いした助成金で、より一層仲間の意識を深め、より親しくなり、緊密度を増加させ楽しむことに努力を傾けるということに全力を注ぎます。その結果、新入会員への配慮が失われ、新しい会員がその輪の中に入っていくことが困難な状況をつくってしまうことであります。うまく輪に入れない新入会員は、RACに魅力を感じる事ができず、退会してい

く者が多くなることは当然の現実であり、先輩ローターアクターたちは、新入会員が去っていくほど仲間意識を強めることに努力を払い、発展性から遠のいた現実をつくり上げていくものであります。

第2の問題点は、提唱RC自身が「自主性」と「自立」という本意の認識の未確立の中で育成させてしまった、RACに対する観念の問題であります。すなわち、提唱RCの内部における意識の改革の必要性の問題であります。RACは自立した組織であるから、RCは深くかかわることを控えるべきだという、誠に未成熟な理念の改革であり、意識の改善への大きな努力の必要性があります。

RIの規約に提唱RCはRACに強くかかわれという指導がありますが、まさしくその真実そのものの言葉であり、確かなる指針だと痛感する限りです。強く深くかかわることによって、認識の相違が減少することは明らかなる事実で、かかわり指導することは提唱RCの責務であります。

提唱RCとしてRACに何らかの問題や困難が生じた時、自らの理念のもとで「おっくう」にならず、責務感を持ってローターアクターとともにその問題解決に助力・協調することが、RACの育成という理念の実践の原点であります。RACはRCの新世代育成という理念と理論の実践の場であるという信念を、深く確立すべきだと痛感します。

RCとRACの認識の相違は、パートナー、という相互の立場を正しく理解し認識を深めることができれば、必ず修正可能なものになると信じると同時に、実際にローターアクトにかかわって、若い世代の中にも、素晴らしい青年たちを発見することができたことを誇りに感じています。

(第2760地区 愛知県)